

平成28年(2016年)7月26日(火曜日)

乳がんの検診と治療について聞く

和歌山病院市民公開講座

国立病院機構和歌山病院は23日、美浜町和田の新棟1階多目的室で、第12回市民公開講座「乳がんの検診と治療」を開き、70人余りの女性たちが集まった。始めに、同病院放射線科撮影透視主任・菊川絢子さんが「マンモグラフィ検診の役割と検診を受ける本当の意味とは」をテーマに講演。乳がんが、2014

年のがん死亡率が高い部位として女性で5位、2011年のがん罹患数が多い部位で女性1位など乳がんに関する統計データを紹介し、12人に1人が乳がんと診断されている現状を述べた。がん検診の目的は、精神的、肉体的、経済的な苦痛を軽減することにあるとして、視触診、超音波、MRI、マンモグラフィなど乳

がん検診の方法を説明。マンモグラフィは、継続的に受ければ乳がん死亡率が15%〜20%低減したというデータもある一方で、乳腺の多い乳房の検診には効果が少ないとの弱点も加え「とりあえず検診を受けていれば安心」ではなく、受診者が自分の乳房の状況や乳がんリスク、年齢などを考えて、自分に適切な乳がん検診を選択できるような啓発したい」と述べた。



乳がんの治療について語る宮坂医師

国立医科大学附属病院助教の宮坂美和子さんは、乳がんの治療について講演。日本の手術法は、乳房切除が減少し、部分切除で乳房を温存し放射線治療を行う方法が増えていたが、2010年以降は保健適応の後押しもあり、しっかりと乳がんを切除し再建する方法が推奨されていることな

ど、その変遷を説明した。薬物療法では、次々と開発されている乳がん治療薬の効果と副作用について解説。がん細胞だけを標的にする分子標的治療、化学療法、放射線治療などにも触れ、かかる費用と、その負担を軽減してくれる高額療養費制度なども紹介した。